

南三陸町

自治体・企業・団体・学校向け



震災復興支援プログラム・防災学習プログラム

南三陸町について **他の被災地自治体が参考にする「南三陸町モデル」から学ぶ!**

震災前の人口約17,700名の南三陸町は、三陸沖の豊かな漁港として昔から栄えてきました。反面、典型的なリアス式海岸の地形的特性により、数多くの津波被害も受けてきました。過去の経験から、町は強固な防潮堤・水門を設置し、さらに住民による避難訓練などを通じて防災意識の向上に努めていましたが、今回の大津波は想定外のものでした。現在、町は残された地域の力で力強く立ち上がろうとしています。この災害を風化させることなく、次の世代に語り継いでいこうと始めた「語り部」の取組みは、今では被災地沿岸部の多くの自治体が「南三陸モデル」として参考にしています。本取組みにより南三陸町は「平成23年度 地域づくり総務大臣賞」を受賞しました。

スケジュール(約3時間半)

(出発時間により、スケジュールは前後します)
(昼食時間 60分を含みます)



ベイサイドアリーナ
町の復興拠点となっているベイサイドアリーナで「語り部ガイド」と合流します。



最大の被害エリア「志津川地区」を視察(約60分)
「語り部ガイド」が同乗し、バス車窓から実際の被災地を案内します。実際の被災エリアを目の当たりにすると、その津波の想像を絶する破壊力に驚かされます。



「3・11 体験談(語り部プログラム)」(約60分)
商店街の中にある講話スペースにて「語り部ガイド」が震災の教訓を後世に伝えます。写真パネル展も併設されています。



「復興屋台村」を視察(約30分)
3月25日にオープンした復興商店街「さんさん商店街」を視察。「復興ショッピング」の時間をお取りします。



途中、ホテル観洋にて「復興昼食」(約60分)

ホテル観洋は震災から一ヶ月後、断水が続く中で「復興の担い手である町民が外に流出することを防ぎたい(阿部女将)」と併設のレストランを再開、2次避難先として被災者を受け入れてきました。ホテル内にNPO法人と地域の子どもの勉強部屋「寺子屋」を設置するなど、現在も南三陸町の復興の先頭に立って営業を続けているホテルです。大型団体宿泊の場合、阿部女将からの震災特別講和の設定も可能です(要相談)

南三陸町の震災・津波の被害状況

発生日時 2011年3月11日(金) 14時46分18秒

震源 三陸沖 震源の深さ約24km M9.0

宮城県北部震度7 南三陸町の震度6弱

大津波警報 2011年3月11日(金) 14時49分発表

人的被害:死者565名 行方不明者280名 (2012年3月10日現在)

家屋全半壊:3,311棟

当日の津波の高さは15~20mにも及びました。

志津川地区:15.9m

戸倉 津野地区:20.5m



市街地を中心とした南三陸町全体(空撮)



南三陸町の浸水範囲
(国土地理院 10万分の1浸水範囲概況図)

2011年3月11日 押し寄せる津波 【プログラム中の写真パネル展で語り部が当日の状況を解説します】



雨と雪の降りしき中、大津波で4階部分までが水に浸かった志津川病院

プログラムの特徴(語り部ガイド)

南三陸町では、今回の震災・津波で最も被害の大きかった三陸地方の中でもいち早く「語り部ガイド」が組織され、後世にこの教訓を語り継いでいこうと活動しています。



再び町の観光ガイドに

「津波が何を教えてくれたのか。それを伝えることが、残された私どもの役目です」

5月29日、宮城県南三陸町の志津川中。被災体験を語った農漁業後藤一磨さん(63)＝南三陸町戸倉＝の締めくくりの言葉は、それまでより少しだけ高く響いた。

住民が自らの体験を語った初めての集い。地元商店主らが開いた「福興市」に町外から訪れた約20人が、耳を傾けた。「語り部」を務めた後藤さんらは、町の観光ガイドサークルのメンバーだ。

3月11日。自宅近くの戸倉中で、翌日の卒業式の後に開かれる同窓会入会式の準備をしていた。経験したことのない大きな揺れ。「必ず津波が来る」と直感した。

急いで帰宅し、妻子を連れて自宅裏の高台に逃げて間もなく大津波が押し寄せた。

後藤さんは、自宅のかやぶき屋根が引き波に乗って島の向こうに消えていくのをぼうぜんと眺めた。

「なぜか、幼いころにアリの巣を壊した時のことを思い出してね。アリたちは卵を運び出したり巣を直したり、右往左往していた。自分たちも同じだな、と」

5月下旬。ガイドサークルのメンバーたちが震災後、初めて顔を合わせた。「皆さんの体験を伝えるべきじゃないですか」。町で活動しているボランティア団体のメンバーから「語り」を勧められた。

震災前に登録していたガイドは33人。顔合わせの席の呼び掛けに応じたのは、後藤さんら12人だけだった。家族や親類を失って話せる状況にない人や、既に町外に避難した人も多い。

町の文化財保護委員でもある後藤さんは、縄文時代の遺跡や古い神社が「不思議と津波の被害に遭っていない」ことに気付いた。

「先人たちは津波にやられたり、生き延びたりしながら、安全な場所を定めてきたのでしょうか。それが人間の生活と自然との関係だったはず。私たちに『自然を操れる』というおごりや慢心がなかったらどうか」

原発事故の風評や影響に象徴されるように、震災は首都圏と地方、消費地と生産地の、遠いようでいて、実は近い関係を浮かび上がらせた。

体験を語る集いの前、ガイドたちは、首都圏から福興市への買い物ツアーでやって来た客たちを町内の被災現場に連れて行った。「お互いの営みがどんな関係にあるのか、それを多くの人に分かってほしい」と思う。

ツアーや語り「学び」の場になるなら、犠牲者たちにも顔向けできる新たな観光産業になる。だから、「言いたいことは言おう」と決めた。

被災体験を語った後、後藤さんは「人間の欲望がかなうことには限度がある。貧しくても幸せな生活はある。そのことを自然が示したのが津波だったのでしょ」と言っ、こう付け加えた。

「お帰りになったら『こういう話をしていた』と、ぜひ周囲に伝えていただければと思います」

(記事提供:河北新報ニュース 若林雅人)

2011年06月26日

2012年3月の南三陸町

未曾有の大震災・大津波から一年が経ちました。元の町の姿に戻るまでは多くの年数を要しますが、美しく、元気な南三陸町は必ず復活します。昨年、数多くの方々が南三陸町を訪れたことから、そのことは確信できます。

今の南三陸町の現状をご視察いただき、一人でも多くの方々に語り継いでいって下さい。



語り部ガイドの皆さん(笑顔は忘れずに皆さんをお迎えています)



写真パネル展は震災の教訓と人の絆を後世に伝えます。



故郷にかける思いを掲げて復興に向かうお魚屋さん。
今は場所を変えて営業中！



取り壊し・撤去が決まった防災対策庁舎
(1年経った今でも、花束を供える人々が絶えません)

2012年3月撮影

震災から1年を迎えた南三陸町

南三陸町の本格的な復興はこれからです。
今でもがれきの山が残ります。がれきの広域処理の問題はこれからです。



2011年10月撮影【志津川病院前】



2012年3月現在【志津川病院前】

がれきの広域処理問題は被災地復興の大きな問題です。
しかし、最も懸念されることは、今回の震災が「風化すること」「忘れ去られること」です。南三陸町の復興はまさにこれからが正念場です。

私たちJT Bグループは、かつてのように美しい海と山と緑に囲まれた南三陸町をこれからも応援し続けていきます。多くの方々の「学びのプログラム」へのご参加をお待ちしております。

2012年2月25日(土)にオープンした復興仮設商店街『さんさん名店街』

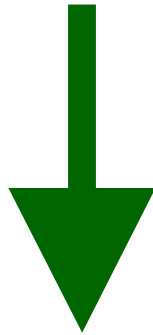
2012年2月26日(日) NHK特集「がれきの町からのエール」で紹介されました。



以前のおさかな通り商店街(震災前は鮮魚店を中心に約20件が立ち並んでいました)



約2km内陸に入った空き地に仮設商店街を計画



かつて賑っていた商店街も津波で消滅



雪が降る中でのオープンとなりましたが、多くの方々に賑わいを見せました。

